次元サード

無花果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
次元サード

【Ｎコード】
Ｎ３４７６Ｕ

【作者名】
無花果

【あらすじ】
掛け声ですべてをナギハラウ友達と冒険する物語

かつこ（前書き）

学校

かつこ

フニャラピタ！
僕には、夢がある！
それは…

三次元に出ることだ！

え？
僕？

自己紹介が遅れました。
僕の名前は人と書いて、「ジン」です。

ここは、二次元の世界、「フィルムトリガー」

世代を担う。二次元の都の物語。
…
……

「おい、ジン！後ろだ！」

「ん？」
僕ジンは友達のケンとちょっと、そこらで狩りをしていたところだった、

「おりゃ！」
貧弱な掛け声と共に、僕の背後に襲いかかってきたモンスターをなぎはらったのである。

「ザクザク

かつこ（後書き）

掛け声

やなかはやはや

＜多分およそ何となく、冒険の香りはしていたのであろう。
＜
＜ジンはモンスターの返り血を浴びて、血まみれクールな描写に成っていた。
＜
＜ケンの叫びは、凄まじい威力だった。
＜
＜「おいおい、お前、あともう少しで下半身不随に成るところだったぜ。」ケンはの言っている意味が不随だった。
＜
＜森　森　森　フィールドで例えるのなら、ここは森林の奥底、深さで例えるのなら、樹林そんな場所だ。
＜
＜「地図があっても迷いそうだな」ケンが言う、
＜言うまでもなく、僕たちは、迷っているのだ。
＜
＜「滅茶苦茶支離滅裂四方八風に迷子遭難になったぜ。」ジンは下半身不随になりそうな、漢字がらめだった。
＜
＜「取り止めもなく、ひ、ただすら、歩き続けるのも、意味を成さないな」ケンははにかむ。
＜
＜「だいたい、ここらへんのグラフィックはえせモノだな、木々がワンパターンだ。」ジン、懇親の吐露。
＜
＜「タメ語放つ前に、駄目を三つ鼻討つ、」

＜「ウケねー。ウケねー。お前、よく正常に生きてられたな」
＜
＜「ウケとか習ってなーよ、僕にそんなセンスねーしな！」ケンが言った。
＜
＜「虱潰しにもなれねーよ、お前のウケ」ジンはケンから、二百五十円を受け取った。
＜な、なんだよ、とジンはウケウケする。
＜
＜「ほら、あそこ」ケンが指差す。
＜
＜「ん？」

なやなはなやた

＜そこには、自動販売機がそびえ立っていた。
＜
＜「え？マジやばっ、ＪＩＨＡＮＫＩだ」ジン、
＜
＜「僕も、あんなおこがましく、馬鹿らしいしかも、禍々しい。」
＜
＜「おい待て、二百五十円はなんだ？」ジャラジャラ。
＜
＜「決まってるだろ。お前と俺の分のお飲み物を買ってんくんだ、簡単単純だろ？」
＜
＜「借りは返さないよ」ジンは悪い奴だ。ジャラつかす。
＜
＜「返さなくて結構だ。これは好意の行為だ」ケンは良い奴だ。
＜
＜「おう、わかった、んじゃ、買ってくるわ、たったったっ」ジンは走って自販機に向かった。
＜
＜自販機の前で一時停止した、ジンは思った。
＜
＜論理的にオカルト地味てね？こんな、困難難行苦行の場所どころに和尚さんだってびっくりします。のいこいのドリンクマネートレーダーが設置されている事に…
＜
＜僕は戦士で剣士だ、勿論、剣士に成るには日頃の鍛錬苦行をこなし、なしとげなければならない。

＜その内の過程で、危険を察したり、直感をゆうしたり、五感だけではない、本能や運と言った、不確定要素を逆利用しなければならいのだ。
＜
＜ジンは上下ジャージの上からシンプルな防弾チョッキを装備している、言うまでもないだろうが、背中には、黒光りする大きいとも、小さいとも言えない、重剣を携えていた。
＜
＜おっと、話が別の方向にうつむいたぜ。
＜
＜話を戻そう。ジンは販売機が何かの罠じゃないかと疑問視する…
＜
＜
＜次回
＜販売機、自販機、どっちが言いやすい？
＜後ご期待！

販売機、自販機

僕は僕成りに、ペットボトルの産品茶とアルミ缶のアップルティーを買った。

「トロいやつめ、さっさと、右手に接着しろ！」右手をコの字にするケン。

「はい、産品茶」ジンはうまい具合にコにはめ込んだ。

「ジンお釣りは？」ケンがクイクイっとコの字の極意をだす。

「無いよ、だって、ちょうどに、お金が無くなったし」

「超ド級！」ケンは不器用な口使いでそう言いつつ、キャップを風圧で開け、爽快に飲み干す。

「実はさ…」僕はテンションを下げる。

「何だよ、気が狂うだろ、そのポーション」

……

沈黙に注目する、2人。

「俺、三次元に行きたいんだ！」僕は森が盛り上がらんとばかりに、誠実な壮絶な果実を飲み干し言った。

「…」

無論勿論、荒唐無稽な宣言で後頭部が前頭部に渡り、側頭部まで浸食汚染洗脳な全能力を振る舞ったのだ、頭がくるまっても可笑しくない、てか、意味が分からない。

「わかったよ…」ケンはいう。

「若田」

「お前が言うのなら、俺は！お前を！世界に！薄っぺらくない奥行きの有る世界に！強制送還してやるよ！」

「ケン…」

僕らは、何も知らない、知らないが為に、他の次元に渡りたいと思ったのだ。
これは僕らの
残酷で下劣でどうしようもない
過ちの物語。

次回
新聞紙
アフター

新聞紙アフター

＜

「お、ケン、それにジンじゃん♪」

その声は、ミリだ。

一応、ヒロイン。

「おう、ミリちゃんじゃないか、どうしたの？こんな所で」

ケンは下がジーンズ、上が赤地青縁マント、一つのワイルドな服装スタイルだ。ちなみに、防御力３がいいところだ。

「ミリとか、重機の銃器、背をちゃって、ギャプマニアもいい魅せもんだ」

ジンはこだわりのある、ミリの装備品にイラッとしている。

「殊は、それが売りもんなの♪」ガチャリ、銃器がうなる。

「自分のこと、『殊』とかいうのもレアだな！斬り殺してぇ～」

「ま、そんな事言うの止めろよ、ほら、どうやら、道案内になりそうだぞ」

ケンが肩を円周に振る

「お前ロリコンだろ、マジキモい」

偏執を振る。

「そう言うオプションも大事だ」ケン

次回
村が火事だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3476u/

次元サード

2011年10月9日10時52分発行